

口 寺

— 初期カダム派寺院の変遷 —

井 内 真 帆

1	はじめに .....	39
2	地理 — ベンユルとカダム派寺院 — .....	40
3	歴代座主と寺院の変遷 .....	42
3.1	基本史料について .....	42
3.2	歴代座主 .....	45
3.2.1	カダム派時代 .....	45
3.2.1.1	チェンガーパ .....	45
3.2.1.2	チェンガーパ以降 .....	49
3.2.2	ゲルク派時代 .....	55
4	現在 — 文化大革命後の復興 (1980年代以降) — .....	58
5	おわりに .....	62
	註 .....	62
	略号表及び参考文献 .....	73

## 1 はじめに<sup>1</sup>

「クムチェースム」sKu mched gsum (御三兄弟) とはカダム派 bKa' gdams pa の開祖ドムトンパ 'Brom ston pa rgyal ba'i 'byung gnas (1004/1005-1064) の主要な三人の弟子を指し、各々、ポトワ Po to pa rin chen gsal (1031-1105) はポト Po to 寺を、プチュンパ Phu chung pa gzhon nu rgyal mtshan (1031-1103) はプチュン Phu chung 寺を、チェンガーパ sPyan snga pa tshul khrim 'bar (1038-1103) は口 Lo 寺を、いずれもカダム派寺院が多く建立されたペンユル 'Phan yul (現在のチベット自治区ラサ市フンドゥブ IHung grub 県を中心とする地域) に建立した。

後にカダム派は、「新カダム派」bKa' gdams gсар ma と呼ばれるゲルク派 dGe lugs pa など他宗派に吸収されたため、現在、厳密な意味でのカダム派寺院は存在しない<sup>2</sup>。しかしながら、カダム派に由来する寺院は宗派を変えながらも、ペンユルをはじめ、トゥールン sTod lung やメルドコンカル Mal gro gung dkar などのラサ周辺 (ウ dBus 地方) に多く現存する<sup>3</sup>。クムチェースムによって建立された三寺も他のカダム派寺院と同じく、宗派がゲルク派に変わるなど、さまざまな変化を経て現在に至る。ポト寺はカダム派寺院の多くがそうであるように、後に尼寺となり、その規模は縮小した<sup>4</sup>。プチュン寺はカダム派の仏教史書が「プチュンパは集団を育てなかったが、隠された方法により無数の弟子をお育てになった」と伝える通り<sup>5</sup>、後継者が少なかったことから、その伝統は途絶え、現在は僅かに仏塔と寺院跡が残るのみである<sup>6</sup>。一方、本稿で取り上げるチェンガーパ建立の口寺は、建立当時 (1095年) から現在に至るまで、宗派間の抗争による混乱 (デイクン派 'Bri gung pa の攻撃, 13世紀) やゲルク派への宗派の移行 (16~17世紀)、そして近年では文化大革命による破壊 (20世紀) など、さまざまな変化を経験したにも関わらず、クムチェースム

建立の三寺の中で唯一、一定の規模を保ちながら存続し続けている。多くのカダム派祖師を輩出し、14世紀中頃には三千人以上の僧侶を有した<sup>7</sup>。宗派がゲルク派に移行してからは「トゥルク・ナムスム（三大転生ラマ）」sPrul sku rnam gsum<sup>8</sup>と呼ばれるチベットの三大転生ラマの一人であるロセンバ・トゥルク Lo sems dpa' sprul sku が同寺に現れて常駐した。転生ラマを有するカダム派寺院は非常に稀であり、ロ寺が現在まで一定の規模を保ちながら存続することができたのはゲルク派以降に現れたこのロセンバ・トゥルクに因るところが大きい。なぜなら、転生ラマを有することは、転生ラマが宗教権力のみならず、政治権力も持ち、社会の中心的役割を担うようになっていったチベット社会の変化に適応することであったからである<sup>9</sup>。現在も同寺は現存するカダム派寺院の中で比較的大きな規模の寺院であり、約50人の僧侶を有する。ロセンバ・トゥルクの転生系譜も続いており、現在は14世である<sup>10</sup>。

本稿では、カダム派寺院の中から、以上のような特色のあるチェンガーパ建立のロ寺を特に取り上げ、同寺の変遷について見ていくことにしたい。

## 2 地理 — ペンユルとカダム派寺院 —

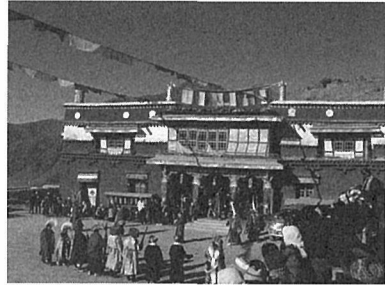
「ベルデン・ロゴン・シェードゥブ・テンペーリン」dPal ldan lo dgon bshad sgrub bstan 'phel gling、通称「ロ・ゴンパ」Lo dgon pa（ゴンパはチベット語で「寺院」の意、以下「ロ寺」と記す）は、ラサ市タクツェsTag rtse 県タンカル Thang dkar 郷のロ Lo の村にある<sup>11</sup>。1095年にチェンガーパ・ツルティムバルにより建立され、チェンガーパの系統である「カダム・ダムガク派」bKa' gdams gdams ngag pa（後述）の最初の寺院である。現在の中国の行政区分ではタクツェ県に属するが、一般には「ペンボ・ロ」'Phan po lo ともいわれることから、ロ寺があるタンカル郷の口の地も広い意味でのペンボ、

つまりペンユルであった。

カダム派はドムトンパが1056年にラ  
 デイン Rwa sgren<sup>12</sup>寺を建立したことを  
 契機として始まる<sup>13</sup>。後、ドムトンパの弟  
 子たちがラサ周辺（ウ地方）にカダム派  
 寺院を次々と建立し、その教えが急速に  
 広がっていった。ツァン gTsang 地方に  
 もカダム派寺院として、ナルタン sNar  
 thang 大蔵経で有名なナルタン寺<sup>14</sup>などがあるが、カダム派寺院の殆どはラサ周  
 辺、特にペンユルに建立された<sup>15</sup>。ペンユルの地は肥沃な農業地帯で、住民の大部分は農業に従事しており、北に行くと半農半牧も見られる<sup>16</sup>。ペンユルはカダ  
 ム派寺院が多く建立されただけでなく、多くのカダム派祖師の出身地でもあ  
 った<sup>17</sup>。

現在、一般にペンユルというと、中国の行政区分でフンドゥブ県<sup>18</sup>を中心とする地域を指すが、歴史的にペンユルは、現在のフンドゥブ県の範囲より格段に広い地域を指した。

ペンユルの歴史は古代チベット王国（吐蕃）以前、ナムリソンツェン Nam ri srong btsan 王（ソンツェンガンポ Srong btsan sgam po, 581-649の父）以前に遡り、敦煌文献にもその名が現れる（P.t. 1286, P.t. 1287<sup>19</sup>）。かつてその名は「ゲーポ」Ngas po として知られ、古代チベット王国以前にチベットに存在した12の小王国を列挙した P.t. 1286に、「ゲーポ国のタスム」Yul ngas po'i khra sum として現れる。さらに、敦煌文献 P.t. 1287の記述から、ゲーポから現在のペンユルに地名が変わったのはナムリソンツェンの時であったことがわかる。P.t. 1287の記述によると、当時のペンユルの範囲はユナ Yu sna の地、つまりディクン 'Bri gung（現在のメルドコンカル県）のあたりからコン Kong,



ロ寺

（2007年1月、写真は全て筆者撮影）

つまりコンポ Kong po (現在のチベット自治区ニンティ Nying khri 区) までの非常に広い地域であった。<sup>20</sup> 古代王国の崩壊後、ペンユルを指す範囲は徐々に縮小していったようであるが、<sup>21</sup> ともかくその範囲は、現在のペンユル、又はフンドゥブ県と言われる範囲よりも格段に広い地域を指したようである。

後伝期初め、カダム派の成立以降、ペンユルはカダム派寺院の所在地とカダム派祖師たちの出身地として、当時のチベット仏教の中心となっていたが、冒頭で述べたように、カダム派寺院は宗派を変え、さらに13世紀のモンゴル軍の侵攻や<sup>22</sup> 20世紀の文化大革命などにより徹底的な破壊を受けたことから、建立当初のまま残っている寺院は皆無である。現存する寺院はどれも小規模であり、20世紀の大学者ゲンドゥン・チューペル dGe 'dun chos 'phel (1903-1951) も『世界知識行・黄金の平原』*gSer gyi thang ma* において、<sup>23</sup> 文化大革命以前のペンユルのカダム派寺院の様子について伝えているが、それによると、20世紀初め、既にカダム派寺院の多くは衰退して規模も縮小していたことが窺える。

### 3 歴代座主と寺院の変遷

#### 3.1 基本史料について

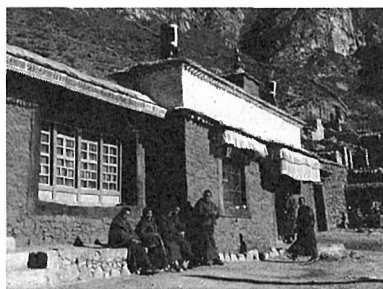
ロ寺に関する基本史料として重要なものは、レーチェン・クンガーギェル ツェン Las chen kun dga' rgyal mtshan (1432-1506) 著『カダム明灯史』*bKa' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me* 第6章「カダム・ダムガク派の伝記を説く章」*bKa' gdams gdams ngag pa'i rnam thar brjod pa'i skabs*<sup>24</sup> とゴ翻訳師 'Gos lo tsā ba gzhon nu dpal (1392-1481) 著『テプテルゴンポ』*Deb ther sngon po* 第5巻中の「チェンガーパからチャユルパの節」*sPyan sngan bya yul ba'i skabs*<sup>25</sup> である。さらに、同寺に保管される独自の寺院史(カ

ルチャク dKar chag) も存在する。この寺院史は、ロ寺前主任のロドー・サムテン Blo gros bsam gtan 氏によって文化大革命後に編纂された。タイトルは『吉祥ロ寺・シェードゥップ・テンペーリンの寺院史、具敬者の信仰方法』 *dPal ldan lo dgon bshad sgrubs bstan 'phel gling gi dkar chags mos ldan dad pa'i jug ngogs* (以下『ロ寺史』) であり、歴代座主や本尊、宗教行事、現状などについてまとめられた139ページに及ぶ手書きのもので、未刊である。カダム派時代の記述に関しては『カダム明灯史』や『テプテルゴンポ』と大きく異なる記述は見られないが、同寺独自の宗教行事の歴史や文化大革命後の寺院復興の様子については、他では得ることができない多くの情報が得られる<sup>26</sup>。以下、『ロ寺史』の目次を示す。

1. 寺院の建立者チェンガーパ・ツルティムバルのご功績概要 (pp. 1-8)
2. 寺院の建立と寺院が次第に発展していったことについて (pp. 9-16)
3. 歴代ロ寺の座主のお名前 (pp. 17-21)
4. 身口意の供養の対象物について (pp. 22-42)
5. ロ寺の僧侶の数について (pp. 43-44)
6. 歴代ロセンバのお名前 (pp. 45-46)
7. 諸々の祭事について (pp. 47-57)
8. ロ寺の典籍と儀軌について (pp. 57-60)
9. 「ロ・ナムカンチューバ」 Lo gnam gang mchod pa と「ロ・クク」 Lo gos sku について (pp. 61-91)
10. ロ寺の僧坊の名称について (pp. 92-93)
11. ラサの「チャムバ・トムシー」 Byams pa khroms gzigs について (pp. 94-98)
12. チャムカン Byams khang の灌頂と儀軌について (pp. 99-103)

13. 吉祥ロ寺の素晴らしい名声などについて (pp. 104-108)
14. ロ寺の現状 (pp. 109-113)
15. 現存する寺院の身口意の供養の対象物について (pp. 114-120)
16. 「ナムカンチューパ」をはじめとする年中行事の復興について (pp. 120-131)
17. 修復されたチャムカンについて (pp. 131-132)
18. 現在のチャムカンの身口意の供養の対象物について (pp. 133-138)

ロ寺の歴代座主を述べるにあたっては、ロ寺の歴代座主がチャユル Bya yul 寺の座主も兼任していたことに注意をしなければならない。チャユル寺は、その名の通り、チェンガーパの弟子のチャユルパ・シヨンヌウー Bya yul ba gzhon nu 'od (1075-1138)<sup>28</sup> が1114年に建立した寺院である。このチャユル寺も現存しており、現在のラサ市メルドコンカル県ニマチャンラ Nyi ma spyang ra 郷にある。「マンラ・チャユル・トウプテン・ナムギューリン」Mang ra bya yul thub bstan rnam rgyal gling, 通称「マンラ・ゴン (マンラ寺)」Mang ra dgon<sup>29</sup> と呼ばれる。現在のチャユル寺を訪れると、1984年に修復され



現在のチャユル寺  
(2007年2月)



チャユル寺裏  
(2007年2月)



たという小さな集会堂 'dus khang と護法堂 mgon khang の二つがひっそりと建つ大変質素な寺院である。<sup>30</sup>しかしながら、現在の集会堂の裏に回ると以前の集会堂跡があり、右邊 (コルラ skor ba) のための回廊跡も見られ、現在の集会堂よりも大きなものであったことがわかる。周辺には僧坊跡もいくつか見られ、かつては大寺院であったことが窺える。

『カダム明灯史』によると、ロ寺の座主がチャユル寺の座主を兼任するようになったのは5代目座主ツァンパ・ドルジェギェルツェン gTsang pa rdo rje rgyal mtshan (1077-1161)、通称ツァンパリンポチェ gTsang pa rin po che の時であったようである。<sup>31</sup>その後いつ頃、ロ寺とチャユル寺が個別に座主を設けるようになったかは明らかではない。<sup>32</sup>建立者も師弟関係にあり、歴史的に座主も兼任されていたほど密接な関係を持っていた両寺院であるが、現在の関係を述べれば、ロ寺とチャユル寺の寺院間の交流は全くなく、僧侶たちの往来も皆無であるという。

『ロ寺史』によれば、ロ寺の座主は現在まで51代を数える。<sup>33</sup>次の節では、上に挙げた三史料 (『カダム明灯史』、『テプテルゴンポ』、『ロ寺史』) を基にし、ロ寺の歴史全体を大きく二つ、カダム派時代と後のゲルク派時代に分け、歴代座主を整理して関係の出来事を挙げつつその変遷を追っていく。

## 3.2 歴代座主

### 3.2.1 カダム派時代

#### 3.2.1.1 チェンガーバ<sup>34</sup>

ドムトンパの主要な三人の弟子、クムチェースムの中で最年少のチェンガーバは、ニェン Nyan のナンラガン sNang ra sgang に、在家 mi chos のナンラ・シェーニェン sNang ra bshes gnyen という家系の父ウエー・シャキヤド

ルジェ dBas shākya rdo rje と母リモ・  
 イェシェードウン Li mo ye shes sgron の  
 息子として、1038年（水・女・酉の年）に  
 生まれた。幼名はタクツァプバル sTag  
 tshab 'bar といった。18歳の時、メー・  
 シェーラプセンバ Mal shes rab sems dpa'  
 建立のツァトク Tsha thog 寺（トゥール  
 ン）にて出家し、<sup>35</sup> 名前をツルティムバル  
 Tshul khri ms 'bar とした。ニェ sNye の  
 ナモチェ Na mo che に居たアティシャ  
 (Atiśa, Dipaṃkaraśrijñāna, 982-1054) と  
 も実際に会い、<sup>36</sup> レンツァラプ Lan tsha rab  
 やルクパ Rug pa において<sup>37</sup> 学び、  
 ブツダガヤ rDo rje gdan に行こうと  
 考えて修  
 辞法やインドの文字を学んだ。

25歳の時、チェンガーバ自身が「自性の瑜伽母」rang bzhin gyi rnal 'byor  
 ma と呼ぶ母に連れられ、<sup>38</sup> ラディンのドムトンパの所に至った。チェンガーバ  
 には、先のインド（ブツダガヤ）に行こうという考えがあったが、ドムトンパ  
 が、インドに行かずに自分の側にいることを勧めたので、チベットに留まり、  
 以後8年間、ドムトンパが亡くなるまで師事した。

一般にカダム派は、ポトワの系統をシュン派 gZhung pa, ゴンパワ dGon pa  
 ba dbang phyug rgyal mtshan (1016-1082) とチェンガーバの系統をダムガク  
 派と呼び、ダムガク派に関しては、ゴンパワの系統（ダムガク派）とチェン  
 ガーバの系統（メンガク派 Man ngag pa）とにさらに分ける場合もある。  
 チェンガーバのダムガク派またはメンガク派は、カダム派の教義の中でも特に  
 密教的色調が強いことが特徴である。それは、ドムトンパが、特別にチェン



チェンガーバ  
 (口寺, 2009年8月)

ガーパに、諸々の密教の口伝（ウパデーシャ upadeśa）を伝授したからであるとされる。<sup>39</sup> それについて、『カダム明灯史』は以下のように述べる。<sup>40</sup>

その時、[チェンガーパが] トンパ（ドムトンパ）に道を行く法 lam gyi 'gro chos のようなものを受けてインドにおいて瑜伽行者と会いたい、とお考えになった。これに対して、ゲシェートンパ（ドムトンパ）が「お前はインドに行くな。わたしが目をかけよう」とおっしゃるので、「トンパ（ドムトンパ）が目をかけてくださるのであればインドに行く意味がない」というお考えが浮かんだ。[中略] そのゲシェートンパ（ドムトンパ）が般若を説いている時、クムチェースムを一つの頭蓋骨（カバリ ka ba li）としてご覧になったことがあった。[チェンガーパは] ゲシェートンパが宗義を説くのを聞きに行かれて、トンパ（ドムトンパ）が、「お前はゴムチェン（瞑想者）[になる] 望みがある。お前は中で瞑想せよ」とおっしゃったので、チェンガー [パ] は礼拝をして行かれた。それに対し、トンパ（ドムトンパ）は、「般若波羅密において行ずる時、それは彼（チェンガーパ）のようなことをいう」とおっしゃった

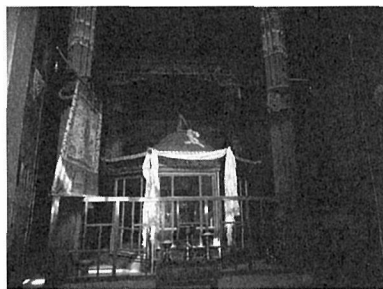
[さらに、]「完全なる瑜伽行者」yongs rdzogs rnal 'byor pa（ネエンジョルパチェンポ rNal 'byor pa chen po, 1015-1077のこと）<sup>41</sup> は、[以下のようなエピソードを出し、]「ゲシェートンパ（ドムトンパ）が心に留めることがあったので、あなた（チェンガーパ）は密教の法を受けても良い [のである]」とおっしゃった

[ある時、] 他の「クムチェー（御兄弟）」二人（ポトワとプチュンパ）の [ドムトンパに差し上げる] 食事は冷めていたが、[一方、] チェンガー [パ] は [食事を] 温めることができた。[チェンガーパは] トンパ（ドムトンパ）に、温かく、不快さも僅かに [心地良い食

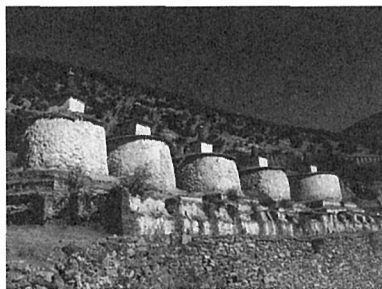
事を] 差し上げ [ることができ]<sup>42</sup> た。その時, [チェンガーパがドム  
トンプに] 口伝をお願いしたので, 大乘の密教の口伝を [チェンガー  
パに] 余すことなくお与えになった

ロ寺が建立されたのは, 1095年 (木・女・亥の年), チェンガーパが63歳の  
時であった。チェンガーパは, 初めに, 「ツクラーカン・カシーマ」 gtsug lag  
khang ka bzhi ma と呼ばれる四柱から成る経堂を建立した。このツクラーカ  
ン・カシーマの中に, 本尊として, アティシヤの主要な弟子の三人, つまりド  
ムトンパ, ネエンジヨルパチェンポ, ゴンパワの三人の銀製の遺影塔と「セル  
ブムユタチェン (十万の金, トルコ石の飾り)」 gser 'bum g-yu phra can とい  
われるものを建立した。ツクラーカン・カシーマは, 再建されて現在もその名  
で呼ばれるが, 三人の遺影塔とセルブムユタチェンは現存しない。そして寺院  
外にはチェンガーパによって三基の仏塔が建立された。<sup>43</sup> これは現存しており,  
現在, 寺院外の仏塔は五基あり, 「タシ・チヨルテン」 bKra shis mchod rten  
と呼ばれる。

晩年, チェンガーパは直弟子のニユクルムパチェンポ sMyug rum pa chen



ツクラーカン・カシーマ  
(2009年2月)



タシ・チヨルテン  
(2007年1月)

<sup>44</sup>po が建立し、チェンガーパ自身が「わたしのブツダガヤ」と呼んで加持した  
 ニュクルム sMyug rum 寺で過<sup>45</sup>ごした。ちなみに、このニュクルム寺は、ペン  
 ユルと同じく多くのカダム派寺院が建立されたルンショー Klung shod<sup>46</sup> という  
 地方にある。チェンガーパはその後、口寺に戻ることなく、ニュクルムにて71  
 歳の時、1103年（水・女・羊）のチベット暦11月21日に涅槃に入<sup>47</sup>った。

チェンガーパには多くの弟子が現れた。主要な弟子は、トゥールンパ sTod  
 lung pa rin chen snying po (1032-1116)<sup>48</sup>、チャユルパ、ニュクルムパの三人で、  
 「比べることのできない三人」'gran gyi do med gsum と呼ばれた。他にも、  
 「四人のゴムチェン（冥想者）」sgom chen bzhi と呼ばれる、サルパ・パクゴ  
 ム Zar pa phag sgom<sup>49</sup>、ルクパ・トンゴム Rug pa ston sgom<sup>50</sup>、マンラ・ゴムパ  
 Mang ra sgom pa<sup>51</sup>、レーパ・センゴム Ral pa seng sgom<sup>52</sup> など多数現れた。

### 3.2.1.2 チェンガーパ以降

チェンガーパ以降の座主について、三史料（『カダム明灯史』、『テプテルゴ  
 ンポ』、『口寺史』）には若干の相違が見られる<sup>53</sup>。表1は、カダム派時代として、  
 チェンガーパから27代目座主ギャマワジンパ rGya ma ba sbyin pa までとそれ  
 ぞれの座主就任期間に生じた出来事を三史料に基づいて挙げたものである。ち  
 なみに、21代目座主リンチェンギェルツェン Rin chen rgyal mtshan はツォン  
 カパ Tsong kha pa blo bzang grags pa (1357-1419) の弟子ではあるが<sup>54</sup>、『口  
 寺史』によれば、口寺の宗派が本格的にゲルク派に移行したのはロセンバ5世  
 ガワン・プンツォーナムギェル Ngag dbang phun tshogs rnam rgyal (1605-)  
 の時であった。因って、27代目座主までをカダム派時代の座主とした<sup>55</sup>。

以下、カダム派時代の口寺について、(1)建造物、(2)事件、(3)特徴の三つに分  
 けて述べる。

(1) 建造物

現在の口寺において中心となる建物は、「ウツェー・コン（上（旧）ウツェー）」dBu rtse gong/dBu rtse rnying paと「ウツェー・メー（下（新）ウツェー）」dBu rtse smad/dBu rtse gsar maの二棟である。チェンガーバにより建立されたツクラカン・カシーマと集会堂、そして護法堂を伴う建物がウツェー・コンであり、もちろん建立当初のままではないが、チェンガーバの時代に遡ることができる寺院内で最も歴史のある部分である。一方、ウツェー・メーは12世紀後半、9代目座主ツァンパ・ジョセー gTsang pa jo



口寺全体  
(2009年8月)



ウツェー・コンの中の集会堂  
(2009年8月)



復元前のウツェー・メー  
(2007年1月)



復元が完了しつつあるウツェー・メー  
(2009年8月)

表1 カダム派時代の座主

	座主名	出来事
1	sPyan snga pa tshul khriims 'bar (1038-1103)	1095年、口寺建立 (KCS, DN, 『口寺史』) 僧侶700人 (『口寺史』)
2	Lo pa gzhon nu smon lam	9年間座主を務める (KCS)
3	rTogs ldan sdings po ba	3年間座主を務める (KCS)
4	sMon lam blo gros	18ヶ月間座主を務める (KCS)
-	rTogs ldan sdings po ba	3代目座主が再び6年間座主を務める (KCS)
-	Dril ba	9年間座主を務める (KCS) *1114年、チャユルバによりチャユル寺建立される (KCS, DN)
5	gTsang pa rdo rje rgyal mtshan (1077-1161)	15年間座主を務め、チャユルバの死後はチャユル寺の座主も務める (KCS)
-	dGe bshes rgya spre'u lo pa	5年間座主を務める (KCS)
-	gZhon nu rgyal mtshan kyi lo pa	24年間座主を務める (KCS)、gZhon nu rgyal mtshan kyi lo pa と Glang lung pa の間に8年間座主不在 (KCS)
6	Glang lung pa rin chen gtson 'grus (1123-1193)	12年間口寺の座主を務め、口寺とチャユル寺両寺の座主を6年間 (KCS) 或いは32年間 (DN) 務める
7	Se rnal 'byor pa bsod nams rgyal mtshan	口寺とチャユル寺の座主を9年間 (KCS) 或いは6年間 (DN) 務める
8	'Be sangs rgyas sgom pa rdo rje gzhon nu (1160-1229)	チャユル寺にて火事が起きるが、座主によって消し留められる (KCS)
9	gTsang pa jo sras	9年間座主を務める (KCS)、ウツェー・メー建立 (KCS, 『口寺史』)
10	Zem ston sangs rgyas ston pa (1191-1256)	18年間座主を務める (KCS)
11	Kham pa lung pa rin chen seng ge (1232-1282)	キャン・メー Khyams smad 学堂などを設立 (KCS, 『口寺史』) 十六羅漢のクク (大タンカ) 造られる (『口寺史』) 27年間座主を務める (KCS, DN)
12	Sangs rgyas gtsang ston	1283年から1285年まで3年間座主を務める (KCS, DN) 1290年、ディクン派により Sangs rgyas gtsang ston 殺され、チャユル寺焼き払われる (KCS, DN) 1286年から1290年まで座主不在 (DN)
13	Sangs rgyas jo bo dbang phyug gzhon nu (1232-1312)	22年間座主を務める (KCS) フビライによりチャユル寺修復される (KCS, DN)
14	Sangs rgyas ston pa tshul khriims seng ge (1263-1325)	僧侶1000人 (『口寺史』)
15	Sangs sgom pa tshul khriims shes rab (1284-1338)	13年間座主を務める (KCS)、1326年にチャユル寺の座主に就任 (DN)
16	Sangs rgyas dbon po gzhon nu smon lam	3年間 (KCS) 或いは18ヶ月間 (DN) 座主を務める コン、カンモチェ、チャンバの三学堂が成立 (『口寺史』) 僧侶3600人 (『口寺史』)
17	Tshul khriims mgon po (1291-1361)	22年間座主を務める (KCS)、1341年から1363年まで座主を務める (DN)
18	gNam gang pa gzhon nu ye shes (1322-1393)	34年間座主を務める (KCS)
19	Tshes bcu pa chos kyi rdo rje	9年間座主を務める (KCS)
20	Blo gros rin chen	
21	Rin chen rgyal mtshan	23年間座主を務める (KCS) *ツォンカバの弟子 (KCS)
22	Byams mgon gnyis pa tshul khriims dar	17年間座主を務める (KCS)
23	bSod nams lha'i dbang po (1423-1496)	39年間座主を務める (KCS)、三学堂が一つになる (『口寺史』)、僧侶300人 (『口寺史』)
24	gCung bsod nams rgyal mtshan	
25	sPyan snga chos grags rgyal mtshan	
26	Bod 'khar mee tri don grub rin chen	
27	rGya ma ba sbyin pa ngag dbang kun dga' don grub	

sras の時に<sup>56</sup> 建立された。このウツェー・メーは文化大革命の際に破壊され、長らく放置されていたが、最近になって復元が始まり、2009年8月現在、ほぼ復元が完了しつつある。

その他、このウツェー・コンとウツェー・メー以外にも、さまざまな建造物が歴代座主によって建造されたようである。ロ寺及びチャユル寺の座主を27年間務めた11代目座主カムパルンパ・リンチェンセンゲ Kham pa lung pa rin chen seng ge (1232-1282)<sup>57</sup> は、ロ寺とチャユル寺に多くの建造物と供養の対象を造った。『カダム明灯史』には以下のようにある。<sup>58</sup>

[カムパルンパは] ロのウツェー・コンに、金の屋根を掛け、隅に縁側を造った。「白い寝室」gzims chung dkar po を建て、[ロ寺とチャユル寺の] 二ヶ所に、宝の布の像で25ト mtho あるものと<sup>59</sup> ジョボ父子（アティシャとドムトンパ）の像、口 gsung の供養の対象物として十万タントラ rgyud 'bum を二セット、ダラニ集 mdo mang 二セットをはじめとする多くをお造りになった。他にも、身口意の供養の対象と、無数の地と空の飾りである供物を安置したこと [など] 驚くべきことをなされた

さらに、ロ寺には学堂（タツァン）grwa tshang も存在したようで、先の11代目座主カムパルンパの時にはキャンメー学堂 Khyams smad grwa tshang が、そして16代目座主サンゲーウォンポ・シヨンヌモンラム Sangs rgyas dbon po gzhon nu smon lam<sup>60</sup> の時にはコン Gong, カンモチェ Khang mo che, チャンパ Byang pa という三学堂が設立された。<sup>61</sup> この16代目座主の時の三学堂は後に、23代目座主ソナム・ヘーワンポ bSod nams lha'i dbang po (1423-1496) の時<sup>62</sup> に一つになったとされるが、いずれにしてもこれらの学堂は現存しない。



## (2) 事 件

カダム派時代、口寺において起こった歴史的事件として最も大きな出来事は、1290年に起きたディクン派<sup>63</sup>による座主の殺害とチャユル寺の放火<sup>64</sup>、そしてその後の再建である。

ディクン派によって殺害された座主は、12代目座主サンゲーツァントン Sangs rgyas gtsang ston<sup>65</sup>であった。彼は1283年から1290年まで8年間座主を務めた。この事件は宗派間の抗争により起こったものであるが、その背景には、各宗派が政治の実権を握るためにモンゴルなどの強力な「施主」と繋がり、いわゆる「施主と帰依処 (チューユン)」mchod yon の関係を結ぶために権力抗争を繰り返していたことがある。チベットの歴史において、最初にモンゴルとこの「施主と帰依処」の関係を結んだのはサキヤ派 Sa skya pa であった。しかしながら、モンゴルの後ろ盾を背景としたサキヤ派の支配に対し他の宗派が無条件に従ったわけではなく、激しい覇権争いが生じた。その覇権争いの一つが、チャユル寺も巻き込まれることとなったサキヤ派とディクン派の抗争である。1290年に起きたチャユル寺の座主殺害と放火は、ディクン派がサキヤ派の支配に抵抗し、反乱を起こした中の一つである。尚、このディクン派の反乱については、乙坂 (1986) において既に詳細に研究がなされている。結果的に、ディクン派はサキヤ派に敗北し、その敗北もチャユル寺の座主が殺害されたと同じ年の1290年に起こった。チベット語史料において、このディクン派の反乱と敗北は「ディクン・リンロク (ディクン派の転覆)」'Bri gung gling log と<sup>66</sup>いわれる。

サキヤ派がモンゴルのフビライ (チベット語ではセチェン Se chen, 1215-1294) と「施主と帰依処」の関係を結んでいたことを象徴するかのよう、ディクン派の攻撃によって破壊されたチャユル寺の再建はサキヤ派の「施主」であるフビライによる出資で行われた。殺害された12代目座主の後、13代目座

主となったのはサンゲージョボ・ワンチュクシヨヌ Sangs rgyas jo bo dbang phyug gzhon nu (1232-1312)<sup>67</sup>であった。サンゲージョボ・ワンチュクシヨヌは、ツェンド bTsan gro 寺の座主を9年間務めた後、60歳の時、1291年、つまり、ディクン派によるチャユル寺放火の翌年にロ寺に至った。『カダム明灯史』によれば、この13代目座主の時、焼失したチャユル寺の再建に対して、フビライが27デ bre (升)の金を寄付し、わずか一年で再建が完了したという。<sup>68</sup>

### (3) 特 徴

カダム派時代の特徴として特筆すべきは、ロ寺と他のカダム派寺院、中でもチェンガーパの系統であるダムガク派或いはメンガク派に属する寺院との相互関係である。先述したように、ロ寺の末寺はチェンガーパの弟子のチャユルパが建立したチャユル寺であったが、同様にロ寺と関係が深い寺院は全てチェンガーパの弟子或いは孫弟子により建立された寺院であった。例えば、チャユル寺以外にロ寺と関係が深い寺院として、ツェンド寺とゲテン rGyal steng 寺の二寺がある。ツェンド寺は、先に述べたチェンガーパの主要な三人の弟子の中の一人であるトゥールンパが、72歳の時、1103年にトゥールンに建立した寺院である。<sup>69</sup>一方、ゲテン寺はチャユルパの弟子のドゥルゴムチェンボ・ワンチュクギェルツェン Brul sgom chen po dbang phyug rgyal mtshan が<sup>70</sup>、メルドコンカルに建立した寺院であり、チャユル寺の末寺でもあった。

ロ寺とこれらツェンド寺とゲテン寺などのダムガク派或いはメンガク派の寺院間の密接な関係は、次の二つの側面から見ればより明確になる。一つ目の側面は座主に関してである。ロ寺の歴代座主は、これら同系統の寺院の座主を経験して後にロ寺の座主に就任する者が多かったようである。13代目座主サンゲージョボは、ツェンド寺の座主を9年間務めた後にロ寺の座主を務めている。

同様に、特に口寺と深い関わりがあったことが窺えるゲテン寺においては、ゲテン寺の座主を務めた後に口寺の座主に就任した者は、3代目座主トクデン  
 デインポパ・ヌプチューバル rTogs ldan sdings po ba snubs chos 'bar,<sup>71</sup> 16代  
 目座主サンゲーウォンポ, 18代目座主ナムカンパ・シヨンヌイエシェー gNam  
 gang pa gzhon nu ye shes (1322-1393),<sup>72</sup> 19代目座主ツェチュパ・チューキドル  
 ルジェ Tshes bcu pa chos kyi rdo rje と大変多い。そしてもう一つの側面は戒  
 律の授受に関してである。歴代座主の出家と受戒の際の場所や戒師を見ていく  
 と、初期の座主数名を除き、<sup>74</sup> 大部分が口寺或いはチャユル寺において戒律を受  
 けていることがわかる。口寺とチャユル寺でない場合は、殆どが先ほどのゲテ  
 ン寺である。<sup>75</sup>

一方、後のロセンバ・トゥルクの時代、つまりゲルク派時代には、これらカ  
 ダム派時代におけるダムガク派或いはメンガク派に属する寺院間の密接な関わり  
 は見られない。デシー・サンゲーギヤムツォ sDe srid sangs rgyas rgya  
 mtsho (1653-1705) は『ヴァイドウリヤセルポ』 *Bai dūrya ser po* において、<sup>76</sup>  
 口寺の法統について述べており、それを見ると、ゲルク派時代の口寺の僧侶た  
 ちは、顕教はデプン・ロセリン学堂 'Bras spungs blo gsal gling grwa tshang  
 或いはセラ・チュー学堂 Se ra bye grwa tshang, 密教はギュトゥー密教学院  
 rGyu stod に赴き学んでいたことがわかる。<sup>77</sup> デシー・サンゲーギヤムツォが伝  
 えるこのゲルク派以来の伝統は現在も続いている。<sup>79</sup>

### 3.2.2 ゲルク派時代

ゲルク派時代の口寺に関しては情報が極端に少ない。それは、ゲルク派以降  
 の口寺について記述する文献が少ないためである。『カダム明灯史』は25代目  
 座主チェンガー・チュターギェルツェン sPyan snga chos grags rgyal mtshan  
 まで、『テプテルゴンポ』は19代目座主ツェチュパ・チューキドルジェまでを

述べる。表2は、ゲルク派時代として、28代目座主であるロセンバ5世から現在までの座主とそれぞれの座主就任期間に生じた代表的な出来事を三史料に基づいて挙げたものである。

先述した師弟関係や教えの系統を中心とするカダム派時代とは対照的に、ゲルク派時代、ロ寺の中心となっていたのは転生ラマのロセンバ・トゥルクである。ロセンバ・トゥルクは「三大転生ラマ」に数えられるが、実際には不明な点が非常に多い。ロセンバ1世ロドー・ギェルツェン Blo gros rgyal mtshan (15c.) は、一般に、ツォンカパの弟子とされるが、彼の単独の伝記は存在せず、後にロ寺の末寺となるチャムカン Byams khang の建立経緯なども伝説的な部分が殆どである。さらに言えば、ロ寺の歴代座主の中にロセンバ5世から14世までは座主として名前が挙げられるが、1世から4世までの名は歴代座主の中に見られない。ゲルク派が転生ラマを制度として取り入れたのは16世紀後半であったので、ロセンバについても、<sup>80</sup>ダライラマやパンチェンラマなどの他のゲルク派の転生ラマと同様、1世から4世は後世になって認定されたという<sup>81</sup>ことも考えられる。

ゲルク派時代、ロ寺における重要な変化は、末寺をめぐるものである。カダム派時代の末寺チャユル寺（現在のマンラ寺）に取って代わり、ゲルク派以降、現在に至るまでロ寺の末寺となったのは、ラサのパルコル Bar skor（ラサのジョカン Jo khang を中心とした環状路）の北側に位置するチャムカンである。チャムカンの名は弥勒仏（チャムバ）Byams pa を本尊とするこ



ロセンバ1世  
(ロ寺, 2009年8月)

表2 ゲルク派時代の座主

	座 主	出 来 事
28	Ngag dbang phun tshogs rnam rgyal (1605-) (ロセンバ5世)	ゲルク派になる (『ロ寺史』)、僧侶508人 (『ロ寺史』)
29	Dre bo nam mkha' bsam grub	
30	Ngag dbang phun tshogs bsod nams dpal bzang (ロセンバ6世)	
31	Slob chung pa gnyen grags rnam rgyal	
32	Blo bzang gnyen grags rgya mtsho (ロセンバ7世)	僧侶533人 (『ロ寺史』)
33	Blo bzang bshes gnyen grags pa rnam rgyal (-1793) (ロセンバ8世)	タクツェのミワン・ソナムトクギェル Mi dbang bsod nams stogs rgyal が施主をしてウツェー・コンの2階に無量寿堂 Tshe dpag lha khang とウツェー・メーの2階に中国式の屋根 rgya phiibs が造られる (『ロ寺史』)
34	Blo bzang bshes gnyen grags pa rgya mtsho (1794-) (ロセンバ9世)	弥勒仏のクク (大タンカ) 造られる (『ロ寺史』)
35	Thub bstan nyin byed grags pa rgya mtsho (ロセンバ10世)	
36	Blo bzang bshes gnyen rgya mtsho (ロセンバ11世)	
37	Byang gling bstan pa rabs rten	
38	dGa' ldan rtse pa ngag dbang bstan 'phel	
39	bShes gnyen byams chos ldan	
40	Lung rig chos 'byor rgya mtsho (ロセンバ12世)	
41	Byang pa ngag dbang chos 'byor	
42	Zhog pa sbyin pa don yod	
43	Nyi sding pa grags pa bstan 'dzin	
44	Lon rgyal sras 'jig med blo gros	
45	Blo bzang thub bstan bshad sgrubs rgya mtsho (ロセンバ13世)	
46	Khang mo che ngag dbang rabs brten	
47	A mdo rib tsa sprul sku ngag dbang blo gros bstan pa	
48	bsTan 'dzin dge legs chos kyi dbang phyug (ロセンバ14世)	1959年以前、僧侶388人 (『ロ寺史』)
49	dGe ba'i bshes gnyen chen po tshul khrims dbyig gnyen	1980年代、寺院の再建と修復が始まる (『ロ寺史』)
50	mKhan chen blo bzang shes rab	ナムカンチューバやロ・ククなどの宗教行事が再開される (『ロ寺史』)
51	sNgags chen blo bzang chos grags (1925-2009)	

とに由来し、建立者はロセンバ1世で、1430年頃に建立されたといわれる。<sup>82</sup> 伝承によると、ロセンバ1世は108の寺院と弥勒仏を建立した。チャムカンの弥勒仏はロセンバ1世が建立したその108の弥勒仏の最初のものであるとい<sup>83</sup>う。「チャムバ・トムシー」Byams pa khroms gzigs と呼ばれるその弥勒



現在の末寺チャムカン  
(2009年8月)

仏は、建立当時、ラサで殺人事件などが多く起こったのに対し、それを防ぐために建てられた、という伝承もある。<sup>84</sup> 二階立てのこのチャムカンには本尊の弥勒仏の他に、大商人の代名詞としてしばしば登場するツォンボン・ノルブ・サンポ Tshong dpon nor bu bzang po の銀製の遺影塔やドゥクパ・カギユ派 'Brug pa bka' brgyud pa のヨガ行者で、「ドゥクニヨン (ブータンの狂人)」'Brug smyon の愛称で知られるドゥクパ・クンレー 'Brug pa kun legs (1455-1529) の瞑想場所 (ツァムカン) mtsham khang や頭蓋骨などがあることから<sup>85</sup>、チベット人商人だけでなく、1959年以前には多くのネパール商人やブータン商人が商売繁盛を祈願して参拝をした。現在も、ラサの中心にあることから、参拝者が途切れることはなく、チャムカンからの収益がロ寺の大きな収入源となっている。現在のチャムカンは文化大革命後、1992年に修復されたものである。<sup>86</sup>

#### 4 現在 — 文化大革命後の復興 (1980年代以降) —

1966年から76年まで続いた文化大革命 (文革) は、中国内地のみならず、チベットにおいても大変な混乱を巻き起こした。数多くの寺院が破壊され、貴重

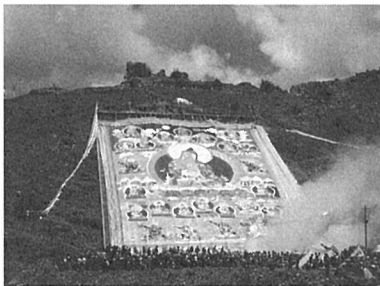
な文化財が失われたばかりでなく、伝統そのものが途絶えたことによる大きな文化の中断が起こった。文革終了後、破壊された寺院の再建や中断していた宗教行事の再興がチベット全土で徐々に行われた。しかしながら、一度途絶えてしまった伝統を再び構築することは容易いことではなかった。ロ寺においても、1980年代から徐々に破壊された寺院の修復や再建が始まった。中断していた宗教行事の復元復興も寺院の再建と同時期に始まり、『ロ寺史』によると、宗教行事の本格的な再開は1985年からであったようである。<sup>87</sup>

現在、ロ寺では一年を通じてさまざまな宗教行事が行われるが、文革後に再開された宗教行事として代表的なものに、チベット暦6月15日に行われる「ロ・クク」Lo gos sku と呼ばれる大タンカ（タンカ thang kha とは仏画のこと）の開帳と、チベット暦11月27日から12月1日まで行われる「ナムカンチューパ（晦日の法会）」gNam gang mchod pa の二つがある。

まず、チベット暦6月15日のロ・ククでは、アティシャを描いたクク（布尊像）gos sku と呼ばれる大タンカが開帳される。<sup>88</sup>この宗教行事は文革終了後も長らく中断されていたが、2001年になってようやく再開された。この大タンカは、普段はウツェー・コンの集会堂に備えられた専用の収納庫に収納され、一年に一度だけ開帳される。現在、ロ寺にある大タンカは、2001年の行事再開に合わせて造られたものであるが、『ロ寺史』によれば、<sup>89</sup>この大タンカ建立の歴史はカダム派時代にまで遡る。元来、ロ寺には新旧二つのタンカがあったとされる。一つは11代目座主カムバルンパの時、つまりカダム派時代に造られた十六羅漢の大タンカであり、もう一つはゲルク派時代、35代目座主ロセンバ10世の時に造られた弥勒仏のタンカである。そして現代、この大タンカ開帳に合わせて翌日16日にはアチェ・ハモ A ce lha mo（一般に「チベットオペラ」と訳される）が上演される。演目は毎年変更されるようであるが、『ノルサン』*Nor bzang* や『ナンサ・ウーブム』*sNang sa 'od 'bum*, 『ティメー・クンデ

ン』 *Dri med kun ldan*, 『スーキニマ』 *gZugs kyi nyi ma*, 『アチ・ギヤサ』 *A chi rgya bza'* などの演目が上演される。<sup>90</sup> 文革以前は地元の口の村からアチェ・ハモを演じる演者が集められていたが、現在はラサにある歌舞団から演者を呼んで上演される。<sup>91</sup>

次に、チベット暦11月27日から12月1日まで行われるナムカンチューパではチャム 'chams (寺院で行われる仮面舞儀礼)<sup>92</sup>が行われる。この行事は、「ラサの五大供養」*IHa sa'i mchod pa lnga*<sup>93</sup>の一つに数えられ、期間中多くの参拝者を集める。この宗教行事が再開されたのは先の口・ククよりも早く、1993年であった。文革により伝統の中断が起きたため、再開当時、口寺にはチャムの儀礼に関する知識と経験を持つ僧侶がいなかった。チャムは密教儀礼の一つであるので、チャムの行程や儀軌をはじめ、ダウン (ホルン) *dung* やギャリン (クラリネット) *rgya gling* などの楽器類にも熟達する僧侶が数人必要となる。そこで、文革以前に口寺の僧侶であり、「チャムボン」*'chams dpon* と呼ばれるチャムを取り仕切る長でもあったケードゥブ・ジャムヤン *mKhas grub 'jams dbyangs* (当時78歳) という人などが指導者として招かれ、1993年の再開に至った。<sup>94</sup> 現在もその時に復元復興されたチャムが毎年行われている。



チベット暦6月15日に開帳される  
アティシャの大タンカ  
(2009年8月)



チベット暦6月16日の  
アチェ・ハモの上演  
(2009年8月)

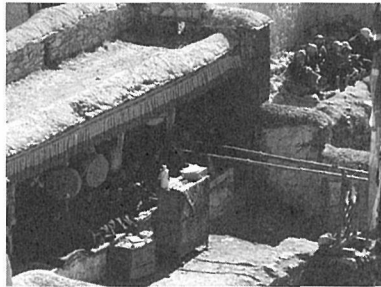




ナムカンチューバの様子  
(2007年1月)



ナムカンチューバの様子  
(2007年1月)



チャムのための演奏をする僧侶たち  
(2007年1月)

ロ寺における寺院の修復及び再建、宗教行事の復興の資金は、海外からの援助や近年増加する漢族の信者などの寄付ではなく、チベット人による布施が殆どであることを付け加えておく。<sup>95</sup>その内訳は、周辺住民からの布施と、毎夏、同寺の僧侶たちによって行われるナクチュ Nag chu (チベット自治区ナクチュ区、ラサの北方で遊牧民が多い地域)での法要、そして先に述べたラサ市内にある末寺チャムカンからの収益である。<sup>96</sup>

## 5 おわりに

以上、現存するチェンガーバ建立のロ寺の歴代座主を示し、1095年の建立から現在に至るまでを概観した。最初に述べた通り、ロ寺がクムチェースムの他の二寺（ポト寺とプチュン寺）や他のカダム派寺院と異なり、一定の規模を保ちながら現在まで存続し、文革後も復興を遂げることができたのは、全てゲルク派以降の同寺の動向に関係する。つまり、ゲルク派以降、師弟関係や教えの系統を中心とする体制から、転生ラマを中心とするチベットの社会に適応するかのように、ロセンバ・トゥルクを同寺の中心とする体制に移行したこと、そしてそれに伴って、ロセンバ・トゥルクに由来し、ラサの中心に位置することから多くの収益を得ることができるチャムカンを末寺としたことである。ロ寺をめぐるこの二つの要因、つまり転生ラマと末寺は他のカダム派寺院の変遷を考える上でも極めて重要な要素である。この二つの要因及びチベット社会の変化に伴ったカダム派寺院の変遷については別稿においてさらに詳しく考察することにした。

### 註

- 1 本稿は、学位論文である拙論（2008）第3章「中央チベットにおけるカダム派の広がり——チェンガーバ建立のロ寺を例として」を基に加筆訂正し、2009年4月から2010年3月まで財団法人りそなアジア・オセアニア財団より助成を受けて行った「チベットにおける文化大革命後の寺院復興——ロ寺を例として」の研究成果も新たに加えたものである。筆者はこれまで、三度（2007年1月と2009年2月、8月）ロ寺を訪れて調査を行った。現地調査に関しては、同寺のトゥプテン・チュター Thub bstan chos grags 氏に資料提供や調査の際のご協力を頂いた。文献の読解、特に本稿で用いた『カダム明灯史』に関しては、ツルティム・ケサン先生（大谷大学名誉教授）にご指導を頂いた。記して感謝を申し上げたい。

- 2 便宜上、本稿ではカダム派に由来する寺院を「カダム派寺院」と呼ぶ。現在、ベンユルにあるカダム派寺院の中で比較的規模が大きい寺院は、ゲルク派のガンデン・チューコル dGa' ldan chos 'khor 寺 (シャン・イエシェージュンネー Zhang ye shes 'byung gnas により建立, Ulrike and Hans-Ulrich Roesler (2004) : pp. 36-37参照) とサキヤ派のナーレンドラ Nalendra 寺 (1436年建立, Jackson (1989) 参照) であり、両寺院の影響からか、ベンユルのカダム派寺院は後にゲルク派或いはサキヤ派に宗派が変わった寺院が多い。
- 3 チベット人の伝統的な地理区分として、チベットを、中央のウ・ツァン dBus gtsang, 東のカム Khams, 東北のアムド A mdo の三地域に分ける。さらに、ラサを中心とする地域をウ、シガツェを中心とする地域をツァンという。ウ地方は現在の中国の行政区分におけるラサ市7県とはほぼ合致する。ラサ市7県とは、トゥールン・デチェン sTod lung bde chen 県, チュシユル Chu shur 県, ニエモ sNye mo 県, ダムシユン 'Dam gzhung 県, フンドゥブ県, メルドコンカル県, タクツェ sTag rtse 県をいう。
- 4 TG : ff. 6b3-6は、「カダム派寺院に尼寺が多い理由はターラーの預言に因る」と述べる。この記述の通り、現在のカダム派寺院には尼寺が非常に多い。Grong khyer lha sa srid gros lo rgyus rig gnas dpyad yig rgyu cha rtso m 'bri u yon lhan khang (ラサ市政協文史資料編纂委員会) (1997) : p. 55に、フンドゥブ県にある寺院の現状についての報告があり、それによると、65ある寺院のうち22の寺院が尼寺である。また、4,109人いる出家者のうち1,367人が尼僧である。つまり、現存するカダム派寺院の約三分の一が尼寺であると言える。
- 5 KCS : ff. 415b3-4.
- 6 プチュン寺跡はベンユルのユンワ Yung ba 地方にある。Ulrike and Hans-Ulrich Roesler (2004) : pp. 50-51に寺院跡の写像がある。
- 7 『ロ寺史』 : p. 43に、ロ寺16代目座主サンゲウオンボの時、3,600人の僧侶を有したという記述がある。
- 8 「トゥルク・ナムスム」は、ゲルク派の三人の転生ラマ (トゥルク), すなわち、ロ寺のロセンバ・トゥルク, オンギューサン・ダルゲーリン寺 'On nges gsang dar rgyas gling のオンギューセー・トゥルク 'On rgyal sras sprul sku, オルガレルン寺 'Ol dga' sle lung のオルガジェトウン・トゥルク 'Ol dga' rje drung sprul sku をいう。Chab spel tshe brtan phun tshogs (1991) : pp. 286-289参照。

- 9 転生ラマ制度は、13世紀、カルマ・カギユ派 Karma bka' brgyud pa から始まり、後にゲルク派などの他宗派もその制度を採用していった。
- 10 現在のロセンバ・トゥルクはラサ在住で、14世ティンレーチュサン 'Prin ras chos bzang, またの名をテンジンゲレク・チューキワンチュク bsTan 'dzin dge legs chos kyi dbang phyug である。
- 11 中国語表記は、拉薩市唐嘎郷羅。ネパールから呼ばれた銀細工の職人が多く住んでいたことから、「ペーボトン (ネパール人の村)」Bal po grong という名も村に伝わる。(2008年2月の現地での聞き取り調査による)
- 12 カダム派の総本山。フンドゥブ県にある。
- 13 カダムの名はクムチェースム以降に名付けられ、特にポトワの時に広まった。羽田野 (1986) : p. 93, p. 105参照。
- 14 ナルトン寺は、トゥムトン・ロドータク gTum ston blo gros grags (1106-1166) により建立された。KCS : ff. 250a6-267a1に歴代座主の伝記がある。
- 15 ゲルク派のセラ Se ra 寺, デブン 'Bras spungs 寺, ガンデン dGa' ldan 寺の三寺を「三大寺」gDan sa gsum と呼ぶが、ゲルク派以前、つまり「三大寺」以前にはサンブネトク gSang phu sne'u thog 寺 (1073年, ゴク・レクペーシェーラプ rNgog legs pa'i shes rab によりに建立), ラトゥー Rwa stod 寺 (1205年, ギャチンルワ rGya ching ru ba により建立。建立者には諸説ある), ツェル・クンタン Tshal gung thang 寺 (1175年, クンタンラマ・シャン・ツォンドウータクパ Gung thang bla ma zhang brtson 'grus grags pa (1123-1193) によりに建立), ガドン dGa' gdong 寺 (13世紀, シクポ・シェーラプ Zhiq po shes rab により建立), キョルモルン sKyor mo lung 寺 (1169年, 阿羅漢ワンチュク・ツルティム dGra bcom pa dbang phyug tshul khrimis により建立), スルブ Zul phu 寺 (詳細不明) の六寺を「六大寺」gDan sa drug と呼んだ。この「六大寺」はツェルパ・カギユ派 Tshal pa bka' brgyud pa のツェル・クンタン寺の一寺を除いて全てがカダム派寺院であり、寺院の所在地も全てラサ周辺であった。
- 16 Chos 'phel (2004) : p. 162参照。
- 17 カダム派寺院が多く建立された理由について、ペンユルのカタム bKa' gtam の地には今も次のような伝承が残されている (2006年2月に行った現地での聞き取り調査による)。

ある日、カダムの7人のゲシェー、すなわち、チエーカーワ 'Chad kha pa ye

shes rdo rje (1101-1175), ランリタンパ Glan ri thang pa rdo rje seng ge (1054-1123), シャラワ Sha ra ba yon tan grags pa (1070-1141), ネウスルパ sNe'u zur pa ye sehs 'bar (1042-1118), ポトワ, カムバルンパ Khams pa lung ba shākya yon tan (1023-11115), プチュンパが食事をした。その地では、茶碗を引っくり返してもバター茶がこぼれなかった。そこで、この地に寺院を建立することを決めた

7人のゲシェーが食事をしたこのカタムの地には、現在、「ヤクロン仏塔」g-Yag rong mchod rten と呼ばれる仏塔が建てられている。以前、ヤクロン仏塔はこの伝承に登場するゲシェーの数と同じく、7基あったとされるが、現在は見られるのは5基のみである。

- 18 フンドゥブ県はラサ市内からガンデン・チューコル寺がある県(ゾン rdzong)の中心まで約80キロ、車で約1時間とラサから近い。
- 19 P.t. 1286及びP.t. 1287の原文は、Spanien・Imaeda：(1979)を使用した。該当箇所には佐藤(1978)：pp.400-403や山口(1985)：pp.466-471などの和訳がある。
- 20 佐藤(1978)：pp.400-403参照。他にも、ゲーボ国の範囲については諸説あり、bSod nams chos dar (2003)：p.47はゲーボの国を東はコンボから西はロバ・トゥー Klo ba stod (現在のラサ市フンドゥブ県ツォトゥー mTsho stod 郷)まで、南はラプデシ Rabs sde bzhi (不明)から北はラディンまでの広大な地域とする。
- 21 古代チベット王国以降のペンユルの歴史については Grong khyer lha sa srid gros lo rgyus rig gnas dpyad yig rgyu cha rtsom 'bri u yun lhan khang (1997)：pp.15-18と bSod nams chos dar (2003) に詳しい。サキヤ派時代(13~14世紀中頃)には「13の万戸」Khri skor bcu gsum の中の一つであるディクン万戸 'Bri gung khri dpon の下に入り、パクモドゥパ時代(14~15世紀前半)にはサキヤ派を制圧し中央チベットと西チベットを支配下に置いたチャンチュブ・ギェルツェン Byang chub rgyal mtshan (1302-1364) が中央チベットに13のゾンを置いた中のペンユル・フンドゥブ・ゾンの下に入った。
- 22 1240年、コデン Köden がチベットに派遣部隊を送った。モンゴル軍はソクチュカ Sog chu kha やペンユルにまで至り、ギェー・ハカン rGyal lha khang (1012年、シャン・ナナム・ドルジェワンチュク Zhang sna nam rdo rje dbang phyug (976-1060) により建立) やラディン寺はモンゴル軍により破壊された。Petech (1990)：p.7参照。

- 23 『世界知識行・黄金の平原』(dGe 'dun chos 'phel (1990) : pp.11-12) に以下のようにある。ちなみに、『黄金の平原』については、加納和雄氏(高野山大学)が和訳を発表予定である。

[パツァブ Pa tshab 寺(パツァップ翻訳師 Pa tshab lo tsā ba nyi ma grags (1055-?) 建立)は、] たいへん粗末な小さなお堂以外何もない。このような大変有名な寺々は歴史などに通じていない者たちがウー・ツァンの方にあると言う以外どこにあるのか全く知らない[そのような]ところに、偶然辿り着いた時は、この上ない喜びと哀しみがそれぞれやってくる。カダム派のお堂は全て不恰好で柱も木の曲がったものばかりで真っ直ぐなものはない。およそそのようではあるが、参詣しただけで法と合致する信仰の念を引き起こす。かのベンユルは人も正直という。土地もとても心地よい

- 24 KCS : ff.164b1-215b4. 現在入手可能な KCS のテキストは以下の木版本と影印版、活字本の計三点である。木版本 : 東北大学図書館所蔵 no.7038, 影印本 : B. Jamyang Norbu (ed). *bKa' gdams kyi rnam par thar pa bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me: A Detailed Account of the Spread of the Kadampa Sect in Tibet*. vol. 1, 2. New Delhi 1972, 活字本 : *bKa' gdams kyi rnam par thar pa bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang. Lhasa 2003. 本稿では木版本と同じ TBRC (The Tibetan Buddhist Resource Center, New York) 所蔵のスクリーンデータを用いた。
- 25 DN : ca. ff.20b1-29a3. DN 第5章は、アティシャとその弟子たち、つまりカダム派史についてであり、該当箇所には羽田野(1986) : pp.129-147の和訳がある。
- 26 筆者は、2008年8月と2009年2月にチベット自治区を訪れた際、著者のロドー・サムテン氏と面会し、『ロ寺史』を本稿で使用する事の許可を得た。現在、氏はロ寺を離れており、ラサ近郊のクンタン寺に常駐している。
- 27 KCS と DN のどちらにおいても、「ロ・チャユルの座主」Lo bya yul gyi gdan sa と記されており、ロ寺とチャユル寺を区別しない。したがって、どちらの寺院を指す内容か判断しかねる箇所もあるが、その内容はチャユル寺についての内容の方が詳細であるように思われる。ちなみに、『ロ寺史』の中にチャユル寺の記述は見られない。
- 28 KCS : ff.171b2-177b3. チャユルパは、トゥールンのゴルコルン Gol go lung にて父ユンドゥンバル g-Yung drung 'bar と母ジャンサ・チャムプ lJang gza' lcam bu の息子として1075年(木・女・子の年)に生まれた。幼名をブムタク 'Bum stag といっ

- た。7歳の時、トゥールンパ sTod lung pa rin chen snying po (1032-1116) に会った。12歳の時、ツアトク Tsha thog 寺 (註35参照) で出家し、名前をシオンヌウとした。チェンゲーパやトゥールンパなどに就いて学び、1138年 (土・男・午の年)、64歳の時に逝去した。
- 29 マラ・ゴン Ma ra dgon (マラ寺) と呼ばれる。Chos 'phel (2004) : pp.215-216 参照。チャユル寺は、メルドコンカル県の中心から車で50分ほどの所に位置する。
- 30 筆者は2007年2月に同寺を訪れた。その際、DN : ca. ff.22a-22b4が伝えるところの、「チャユルパが寺院建立の際、その土地にいた大きなル (龍) klu の上に寝台を置いて調伏した」といわれる、ルがいたとされる穴が現在もチャユル寺の集会堂に残っているのを確認した。
- 31 KCS : ff.179a2-182b. (TBRC のスキャンデータは f.182b の一葉が欠落している) ツァンパリンポチェは、ゴク翻訳師 rNgog blo ldan shes rab (1059-1109)、ニエン翻訳師 gNyan lo tsā ba dar ma grags, バリ翻訳師 Ba ri lo tsā ba rin chen grags (1040-1112), ラ翻訳師 Rwa lo tsā ba rdo rje grags (1016-1128/1129), ツェンカポチェ bTsan kha bo che (1021-?, ゴク・ロデンシェラブ等とカシミールに留学に行った人物) の5人の翻訳師を師に持つ人物で、チャユルパに14年間師事した。
- 32 DM : pp.64-65はチャユル寺の歴代座主のみを次のように記す。(1)チャユルパ, (2) ツァンパリンポチェ (5代目口寺座主), (3)リンポチェ・ランルンパ (6代目口寺座主), (4)サンゲーゴムパ Sangs rgyas bsgom pa, (5)ソム・ツェリンモワ Zom tshe ring mo ba, (6)カムバルンパ (11代目口寺座主), (7)ロボン・ジョボ (13代目口寺座主), (8)サンゲートンパ (14代目口寺座主), (9)ロボン・ゴムパ (15代目口寺座主), (10)ロボン・ゲルテンパ (16代目口寺座主), (11)ロボン・チェンゲーパ・ツルティムゴン (17代目口寺座主)。該当箇所には稲葉・佐藤 (1964) : pp.143-145の和訳がある。
- 33 51代目座主ガチェンリンポチェは、丁度、本稿を執筆中であった2009年10月に逝去された。
- 34 チェンゲーパの伝記は単独のものはないが、KCS : ff.164b1-168b3が詳しく、DN : ca. ff.20b-21aにも僅かな記述がある。本稿では、主に KCS の記述に従ってまとめた。
- 35 KCS : ff.82a5-b2によると、メー・シェーラブセンバはツアトク寺の建立者で、アティシャの弟子に数えられる。ツアトク寺はチェンゲーパとチャユルパが出家した場所である。

36 KCS : ff. 165a3-4に、チェンガーパとアティシャの面接について次のようにある。

[アティシャはチェンガーパの] 頭頂に御手を置き、サンスクリット語で多くの吉祥の言葉をおっしゃった。セルリンパ gSer gling pa (アティシャの師の一人) の瓶である蓮華の如瓶を与え、「わたしの法の伝統を守る者が来た」とおっしゃった

37 レンツアラブとルクパの両地名は、ルンショーにあると思われるが、詳細は不明。

38 DN : ca. ff. 20b1-2はチェンガーパがラディンに至ったのは20歳の時とする。

39 TG : ff. 13b1-4も三つの違いを以下のように説明する。以下、和訳を拙論(2004) : p. 296を訂正して示す。

ジョボ父子 (アティシャとドムトンパ) からゲシェー・ゴンパワ、そしてネウスルパなどに順に継承され、ドム・リンポチェ (ドムトンパ) からゲシェー・チェンガーパ、そしてチャユルパなどに継承されたものは「カダム・ダムガク派から継承されたもの」といわれ、ドム・リンポチェからゲシェー・ポトワ、そしてシャラワなどに継承されたものは「カダム・シュン派」と名付けられた。二つ (シュン派とダムガク派) とも内容においては等しいが、典籍の講説の議論を詳しくする (シュン派) か、しないか (ダムガク派) という点において別々に数えるだけである

40 KCS : ff. 165b1-166a2.

41 KCS : ff. 107b1-108b2. ネエンジョルバチェンポは、ドムトンパとゴンパワに並ぶアティシャの重要な直弟子である。ドムトンパが亡くなった後、14年間ラディン寺の座主を務めた。

42 原文 (KCS : f. 166a1) は, sku mched gzhan gnyis kyi dro'i du ba reng byung dus/ spyang sngas dro thon par byas/ ston pa dro bar khan a bzhes skyo sun re gsol bas/.『藏漢大辞典』(Zhang Yisun (1993) : pp. 1336-1337) によれば、名詞「dro」は「途中の食事、持ち運ぶ食事」の意味で、一方、動詞「dro」は「温める」の意味。

43 KCS : ff. 167a2-4.

44 KCS : ff. 171a4-5. ニュクルンパは、ガンポバ sGam po pa (Dwags po lha rje bsod nams rin chen, 1079-1153) の師の一人でもある。

45 KCS や DN の記述からニュクルム寺とロ寺の間には座主や僧侶の行き来が頻繁にあったことが窺え、ロ寺と関係が深かったようである。DN : ca. f. 20b7に、チェンガーパがニュクルム寺に行った経緯について、「ロからニュクルムへ移住なされたの



- は、口の上座が信敬しなかったがためである、と思われる」(和訳は、羽田野(1986) : p.128) とあるが、KCSにこのような内容は見られない。
- 46 ルンシヨーについて、Dung dkar blo bzang 'phrin las (2002) : p.123に、「ラサのキチュ sKyid chuの上流にあるウルトゥー dBu ru stod (キチュの上流ディクンなどの地域)などをいい、その範囲にはラディン、ディクン、ウトゥー dBu stod (ウルトゥーと同じ意味)、メルドコン (ラサの東、現在のメルドコンカル県) などがある」とある。
- 47 KCS : ff.168a5-6に、「口の人たちは、[チェンガーバの] ご遺体を盗んで [口に] お招きする計画を立てたが、お招きできずに、そのツァンカ gtsang kha (地名と思われるが不明)においてご遺体を焼くことを望んだ」とある。
- 48 KCS : ff.168b3-170b3. トゥールンパは最初、パンディタ・ブムタクスンバ 'Bum phrag gsum pa (スムリティジュニャーナキールティ Smrtijñānakīrti と同時期にチベットに来ていた人物)などに学び、その後、セ・チルブパ Se spyil bu pa chos kyi rgyal mtshan (1121-1189) の弟子ケンパタレ Gan pa da re 建立のカル mKha' ru 寺にて学んだ。アティシャとも会い、ネエンジョルパに8年間、ゴンパワに5年間師事し、ネエンジョルパが亡くなった後はチェンガーバに師事した。72歳の時、1103年にトゥールンにツェンド bTsan gro 寺を建立した。
- 49 KCS : f.171a5-6. メルドーに、「サルを経堂」Zar gyi gtsug lag khang を建立。
- 50 KCS : ff.171b1-2. ルンシヨーに「ルクバの法堂」Rug pa'i mchod khang を建立。
- 51 KCS : ff.171a6-171b. タンキャ Thang skya 寺を建立した。タンキャ寺は現存する寺院で、Chos 'phel (2004) : pp.219-220は建立者をチェンガーバとする。
- 52 KCS : f.171a1. ルンシヨーに、「ガルの法堂」Ngar gyi mchod khang を建立。
- 53 BS も口寺の座主を記している。BS : pp.171-172に、32代目座主ロプサン・ニエンターギャムツォ (ロセンバ7世) までが記されている。ちなみに、『口寺史』にある座主の順番はBSと同じである。
- 54 KCS : ff.206b5-6.
- 55 『口寺史』 : p.13.
- 56 KCS : f.108b4. DN はツァンパ・ジョセーを座主に数えない。
- 57 KCS : ff.192a3-194b4. 11代目座主カムパルンパは、12歳の時にチャユル寺にて出家して沙弥戒を受け、19歳の時にキョルモルン寺にて比丘戒を受けた。25歳の時、前座主のサンゲーセムトンが亡くなった年、1256年 (火・辰の年) に口寺に至った。

- 58 KCS : ff. 193b3-4.
- 59 原文 (KCS : ff. 193b3-4) は radna'i sku 'bag ras la mtho nyi shu rtsa lnga yod pa re/. 「sku 'bag」は、像の他に仮面の意味もある (Zhang Yisun (1993) : p. 123)。「ト」は長さを示す単位で、親指から中指までの長さをいう (Zhang Yisun (1993) : p. 1217)。
- 60 KCS : ff. 200b5-6. 特に詳しい記述は見られない。
- 61 『ロ寺史』 : p. 11.
- 62 『ロ寺史』 : p. 12. ソナム・ヘーワンポについては KCS : ff. 207b1-208a5を参照。ソナム・ヘーワンポは、カダム派の仏教史 (KCN) を1484年に著した人物である。この KCN は現在あるカダム派の仏教史の中で最も早く成立したものである。
- 63 デイクン派はジクテンゴンポ 'Jig rten mgon po rin chen dpal (1143-1217) から始まるカギユ派の一派で、本山はジクテンゴンポにより1179年に建立されたデイクンティ 'Bri gung mthil である。立川 (1987) : p. 8参照。
- 64 DN : ca. ff. 28a 6-7は、サンゲーツァントンが座主を務めたのは3年間で、チャユル寺が焼失したのは1285年 (木・酉の年) とする。
- 65 KCS : ff. 194b4-6. 特に詳しい記述は見られない。
- 66 「デイクン・リンロク」という言葉は、KCS : f. 194b6や DMS : f. 53b5に見られる。BDR : pp. 123-124によれば、この事件はデイクンティ第7代目座主ドルジェ・イエシェ rDo rje ye shes (1223-1293) の時に起こった。
- 67 KCS : ff. 194b6-197a1. 主に10代目座主サンゲーセムトンに師事し、22年間座主を務めた。
- 68 KCS : ff. 196b3-6に、1291年 (鉄・卯の年) にサンゲージョボがチャユル寺に戻る道中、ある船頭に、一年で修復が完了すると話していることから、修復が完了したのは1292年 (鉄・辰の年) と思われる。しかしながら、ここで疑問が残るのは、当時、ペンユルに多くあった寺院の中で、なぜチャユル寺がデイクン派の標的になったのか、またロ寺はデイクン派の攻撃を免れたのか否か、であるが、残念ながら文献からは知り得ない。
- 69 KCS : ff. 169b4-5. 特に詳しい記述は見られない。
- 70 現存しており、現在のメルドコンカル県にある。現在の宗派はゲルク派。1988年に修復され、15人ほどの僧侶がいる (Chos 'phel 2004 : pp. 225-226)。
- 71 KCS : f. 178b4. DN には座主としての記述がない。

- 72 KCS : ff. 203a1-203b6. 彼は11歳の時、ゲテン寺にいた16代目座主を戒師に出家し、19歳の時、17代目座主を戒師に比丘戒を受けた。41歳の時、1361年に口寺に至り、34年間座主を務めた。
- 73 KCS : ff. 203b6-206b4. 14歳の時、17代目座主より居士戒を受け、21歳の時、チャユル寺にて同じく17代目座主が親教師をして比丘戒を受けた。チャー Byes 寺 (詳細不明) の僧院長を3年とゲテン寺の座主を28年、口寺の座主を9年間務めた。
- 74 例えば、6代目座主ランルンパ・リンチェンツォンドウ (1123-1193, KCS : ff. 182b-184b4) は『入中論』 *Madhyamakāvātāra* の翻訳で有名なパツァブ翻訳師を親教師に、パボンカ Pha bong kha 寺にて沙弥戒を受けた。25歳の時、学問寺サンブ・ネウトクの座主であったチャバ・チューキセング Phywa pa chos kyi sneg ge (1109-1169) を軌範師として比丘戒を受けた。
- 75 他に例外的に、11代目座主と13代目座主が受戒したキョルモルン寺 (「六大寺」の一つ) や14代目座主サンゲートンパ・ツルティムセングが受戒したゲイエ dGe ye 寺 (ゲイエバ・チャンチュプウー dGe ye pa byang chub 'od により建立) の名も見られる。キョルモルン寺もゲイエ寺もチェンガーパの系統ではないものの、どちらもカダム派寺院である。
- 76 BS : pp. 171-172.
- 77 ゲルク派の密教学院の一つ。ギュトウーとギユメー rGyud smad の二つがあり、現在、ギュトウーはラモチェ Ra mo che, ギユメーはムル rMe ru 寺を拠点とする。Dung dkar blo bzang 'phrin las (2002) : pp. 710-712, pp. 713-716参照。
- 78 デブン・ロセーリン学堂はデブン寺の7学堂ある中の一つであり、セラ・チャー学堂はセラ寺に6学堂ある中の一つである。学堂については、小野田 (1989) に詳しい。
- 79 現在、口寺の僧侶は主にロセーリン学堂に赴き、顕教を学ぶ。
- 80 ダライラマ1世とパンチェンラマ1世は共に、ツォンカパの直弟子のゲンドゥンドゥブ dGe 'dun grub (1391-1474) とケードゥブジェ mKhas grub rje (1385-1438) であるが、両者は生存中に転生者に認定されたのではなく、ダライラマは3世ソナム・ギャムツォ bSod nams rgya mtsho (1543-1588), パンチェンラマは4世ロブサン・チューキギェルツェン Blo bzang chos kyi rgyal mtshan (1567-1662) が初めて認定された転生者であった。山口 (1987) : p. 132参照。
- 81 ロセンバ・トゥルクに関する記述は非常に少ない。BS : p. 172によると、ダライラマ5世 Ngag dbang blo bzang rgya mtsho (1617-1682) 代のロセンバは5世ロブサ

ン・ニェンタープンツォーである。ロ寺の座主として現れない1世から4世を示せば以下の通りである。ロセンバ1世ロドー・ギェルツェン (15c.), ロセンバ2世モンラム・ロドー sMon lam blo gros (?-1553), ロセンバ3世タクパ・ギェルツェン Grags pa rgyal mtshan (1554-1572/1604), ロセンバ4世ガワン・チューキギヤム ツォ Ngag dbang chos kyi rgya mtsho (1573-?)。ロセンバの転生系譜については, Chab spel tshe brtan phun tshogs (1991) : pp. 286-289及び『ロ寺史』: pp. 45-46を参照。

82 『ロ寺史』: p. 99.

83 『ロ寺史』: p. 94.

84 Dung dkar blo bzang 'phrin las (2002) : pp. 1480-1481参照。

85 瞑想場所 (ツァムカン) 以外は現存しない。

86 Alexander (2005) : pp. 165-167にチャムカンの詳細な建物配置図がある。

87 『ロ寺史』: pp. 120-123.

88 「クク」については, 山口 (1987) : p. 330参照。

89 『ロ寺史』: pp. 88-90.

90 アチェ・ハモはタントン・ギェルポ Thang ston rgyal po (1361-1485) によって創始された歌舞劇のことである。山口 (1987) : pp. 303-307と三宅・石山 (2008) に詳しい。

91 2009年の演目は『ペーマオンバル』*Pad ma 'od 'bar*で, ラサにあるニャンレー・ハモ歌舞団 Nyan bran shang dmangs khrod las zhor sgyu rtsal tshogs pa によるものであった。

92 8世紀, パドマサンヴァバ Padmasambhava がサムイェー bSam yas 僧院建立の際の地鎮祭と落慶式に鼓舞を取り入れたのがチャムの起源とされる。木村 (2007) : p. 7 参照。

93 他の4つの行事は, ガンデン・ガプチュー dGa' ldan lnga mchod (チベット暦10月25日, ツォンカバ入滅の日), クンタン寺のメトー・チューパ Gung thang me tog mchod pa (チベット暦4月15日), ラディン寺のクチュ・チューパ Rwa sgreng khu byug mchod pa (チベット暦4月15日), サムイェー寺のドゥデ・チューパ bSam yas 'dus sde mchod pa (チベット暦4月15日) である。Chos 'phel (2004) : p. 249参照。『ロ寺史』は, ガンデン・ガプチューを除いて「ラサの四大供養」とする。

94 今後, チベットにおける文革後の各寺院の復興については十分に調査される必要が

ある。木村 (2007) は、モンゴル国の文革ともいえる「肅正」によって中断したモンゴル国におけるチャムの伝統について、現地調査を行い報告した研究である。その中で氏は、文革後のチベットにおいてもチャムが復元復興されたことについて言及している。アムドのゲルク派寺院ラプラン Bla brang 寺 (1709年建立) では1982年にチャムが再開した。それは、ロ寺のチャムの復元復興と同様で、文革以前の僧侶を指導者として招いてチャムの儀礼や儀軌の方法を学び、再開させたというものである。ちなみに、1980年代、チベットにおいてこれらの宗教行事が徐々に再開されたのは、パンチェンラマ10世 (1938-1989) がチベットの伝統文化に対する保護政策を精力的に行っていたからであり、ラプラン寺のチャムの再開も10世の命によるものであったという。このラプラン寺のチャムがモンゴルへと伝わり、中断されていた伝統が回復したという。木村 (2007) : pp. 14-15参照。

95 木村 (2007) : pp. 4-5によると、モンゴル国において、復興されたチャムは外貨獲得のための外国人観光客誘致のために用いられているという。しかしながら、ロ寺においては、チャムをはじめとする宗教行事は外国人観光客やさらには近年目立つ中国内地の漢族の観光客をターゲットにしたものではない。

96 伝統的に、ロ寺の施主はナクチュに多く、十数人の僧侶が気候の良い夏期の数ヶ月間、ナクチュに法要に出かける。この夏期のナクチュでの法要には、同じくロの村にあり、カダム派寺院であったキェンツァン Khyung tshang 寺 (Chos 'phel (2004) : p. 247) の尼僧も同行する。

## 略号表

BDR : 'Bri gung bstan 'dzin pad ma'i rgyal mtshan (1770-1826). *Nges don bstan pa'i snying po mgon po 'bri gung pa chen po'i gdan rabs chos kyi byung tshul gser gyi phreng ba*. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, Lhasa 1989.

BS : sDe srid sangs rgyas rgya mtsho (1653-1705). *dPal mnyam med ri bo dga' ldan pa'i bstan pa zhwa ser cod pan 'chang ba'i ring lugs chos thams cad kyi rtsa ba gsal bar byed pa bai dūrya ser po'i me long*. Krung go bod kyi shes rig dpe skrun khang, Zi ling 1989. (『ヴァイドゥリヤセルポ』)

DM : Tshal pa kun dga' rdo rje (1309-1364). *Deb ther dmar po rnams kyi dang po hu lan deb ther*. Mi rigs dpe skrun khang, Beijing 1981.

- DMS : Paṅ chen bsod nams grags pa (1478–1554), *Deb ther dmar po gsar ma*. in G. Tucci. *Deb ther dmar po gsar ma: Tibetan Chronicles by bSod nams grags pa*. (Serie Orientale Roma 24). Roma 1971.
- DN : 'Gos lo tsā ba gzhon nu dpal (1392–1481), *Deb ther sngon po: The Blue Annals*. (Śata-Piṭaka Series 212). International Academy of Indian Culture. New Delhi 1974. (『テプテルゴンポ』)
- KCN : Lo dgon pa bSod nams lha'i dbang po (1423–1496), *bKa' gdams rin po che'i chos 'byung rnam thar nying mor byed pa'i 'od stong*. in Gonpo Tseten (ed.), *Two Histories of the bKa' gdams pa Tradition from the Library of Burmik Athing*. Gantok 1977. pp. 207–393.
- KCS : Las chen kun dga' rgyal mtshan (1432–1506), *bKa' gdams kyi rnam par thar pa bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*. TBRC W23748 2593. (『カダム明灯史』)
- TG : Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma (1737–1802), *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shal gyi me long*. dGon lung edition. (英訳 : Geshe Lhundup Sopa 2009)

## 参考文献

井内真帆

- 2004 「トゥケン『一切宗義』カダム派の章研究」『大谷大学大学院研究紀要』21, pp. 283–310.
- 2008 「後伝期初期のチベット仏教世界——カダム派を中心として」学位請求論文, 大谷大学.

稲葉正就, 佐藤長 (共訳)

- 1964 『フウラン・テプテル——チベット年代記』法蔵館, 京都.

乙坂智子

- 1986 「リゴンバの乱とサキヤバ政権——元代チベット関係史の一断面」『仏教史学研究』29-2, pp. 59–82.

小野田俊蔵

- 1989 「チベットの学問寺」『チベット仏教』(岩波講座東洋思想11) 岩波書店, 東

京, pp. 351-373.

木村理子

2007 『モンゴルの仮面舞儀礼チャム —— 伝統文化の形象と創造の現場から』(ブックレットアジアを学ぼう7) 風響社, 東京.

佐藤 長

1978 『チベット歴史地理研究』岩波書店, 東京.

1986 「パクモドゥパ政権初期のチベット情勢」『中世チベット史研究』同朋舎, 京都, pp. 89-171.

立川武蔵

1987 『西藏仏教宗義研究 (第5巻) —— トウカン『一切宗義』カギユ派の章』東洋文庫, 東京.

羽田野伯猷

1986 「カーダム派史 資料篇」『チベット・インド学集成』第一巻(チベット篇 I), 法蔵館, 京都, pp. 46-191.

三宅伸一郎, 石山奈津子 (共訳)

2008 『天翔ける祈りの舞 —— チベットの歌舞劇アチュ・ラモ三話』臨川書店, 京都.

山口瑞鳳

1983 『吐蕃王国成立史研究』岩波書店, 東京.

1985 「チベット史文献」『敦煌胡語文献』(講座敦煌6) 大東出版社, 東京, pp. 453-484.

1987 『チベット』上 (東洋叢書3), 東京大学出版会, 東京.

Alexander, A.

2005 *Temples of Lhasa: Tibetan Buddhist Architecture from the 7th to 21st Centuries*. Serindia Publications. Chicago.

Blo gros bsam gtan

未刊 *dPal ldan lo dgon bshad sgrubs bstan 'phel gling gi dkar chags mos ldan dad pa'i 'jug ngogs*.

bSod nams chos dar

2003 'Phan po dang lhun grub rdzong zhes ming gi byung tshul brjod pa sngon

byung gsal ba'i gtam. *sPang rgyan me tog* 2003 (4), pp. 47-49.

Chab spel tshe brtan phun tshogs (ed.)

1991 *Bod kyi gal che'i lo rgyus yig cha bdams bsrigris*. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang. Lhasa.

Chos 'phel

2004 *lHa sa sa khul gyi gnas yig*. (Gangs can bod kyi gnas bshad lam yig gсар ma 2). Mi rigs dpe skrun khang. Beijing.

dGe 'dun chos 'phel

1990 *rGyal khams rig pas bskor ba'i gtam rgyud gser gyi thang ma*. in Hor khang bsod nams dpal 'bar (ed.), *dGe 'dun chos 'phel gyi gsung rtsom* 1. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang. Lhasa. (『世界知識行・黄金の平原』)

Dung dkar blo bzang 'phrin las

2002 *Dung dkar tshig mdzod chen mo*. Krung go bod rig pa dpe skrun khang. Beijing.

Geshe Lhundup Sopa (tr.), Jackson, R. (ed.)

2009 *The Crystal Mirror of Philosophical Systems: A Tibetan Study of Asian Religious Thought*. (The Library of Tibetan Classics 25) Wisdom Publications. Boston.

Grong khyer lha sa srid gros lo rgyus rig gnas dpyad yig rgyu cha rtsom 'bri u yon lhan khang

1997 *lHun grub rdzong*. (Grong khyer lha sa'i lo rgyus rig gnas 4). Lhasa.

Jackson, D.

1989 *The Early Abbots of 'Phan po Na lendra: The Vicissitudes of a Great Tibetan Monastery in the 15th Century*. (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 23). Wien.

Petech, L.

1990 *Central Tibet and the Mongols: The Yüan Sa skya Period of Tibetan History*. (Serie Orientale Roma 55). Roma.

Shes gnyen tshul khrims

2001 *lHa sa'i dgon tho*. Bod ljongs mi dmang dpe skrun khang. Lhasa.



Spanien, A., Imaeda, Y. (eds.)

1979 *Choix de Documents Tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale*. Tome II. Bibliothèque Nationale. Paris.

Ulrike and Hans-Ulrich Roesler

2004 *Kadampa Sites of Phempo: A Guide to Some Early Buddhist Monasteries in Central Tibet*. Vajra Publications. Kathmandu.

Zhang Yisun (eds.)

1993 *Bod rgya tshig mdzod chen mo*. Mi rigs dpe skrun khang. Beijing.